

「酒の井」

むかし、むかし印旛沼の近くの村に貧しい百姓が住んでいました。家が貧乏な上に父も大分年をとって働くこともできませんでした。

いいことにはたった一人の息子が大変な親孝行者でして、年とった親によくつかえて近所でも評判でした。

ところが、この父親はお酒が大好きでした。親思いの息子は家の仕事を一生けんめいにやるとともに、他人の仕事も手伝っては手間賃をかせぎ、わずかにお酒を買うお金をつくり、毎日お酒を買って父親に飲ませ、喜んでお酒を飲む父親の顔を見ることを楽しみにしていました。

ある日のことどうしてもお酒を買うお金が手に入りません。このままお酒をもたずに帰ったらどんなに父親はがっかりするだろう。父をがっかりさせることはこの上ない親不孝だと心をいためていました。どうすることもできなくて心配しながら家の方に向かっていました。ところがたまたま通り道のある井戸のそばを通ると、どうしたことでしょう、酒のにおいがぷーんと鼻をついてきます。

親孝行者の息子は大変ふしぎに思うとともにうれしさも一ぱいでした。早速手にくんでなめてみると、これはほんとうに、まちがちなしにお酒でした。大喜びで竹つっに入れ、家にもちかえって父親にすすめますと、

「こりやいい酒や、こんなうまい酒ははじめてだ。」と大変な喜びようでした。そして

「年をとってこんないい酒を飲ましてもらえるなんてありがたいことだ。」と何度もくりかえしていいました。

こうして孝行者の息子は、毎日この井戸からお酒をくんで、父親のもとへもちかえるのでした。

そして、それからは、お酒を買うこともなくなり、一生けんめいはたらいで得たお金も少しずつたまって、暮らしもだんだんとよくなっていききました。

このうわさを伝え聞いた人たちは、この井戸水を飲んでみました。が、お酒ではなく普通の井戸水とならかわりありませんでした。

そして、このふしぎなできごとは、この若者の親を思う真心が天に通じたのだと、みんながほめたたえました。

この井戸を酒の井戸といい、世間にも知られて村の名も酒々井と改めたと言うことです。

